世界遺産登録事情４　　≪阿知使主、縫工女を奉す≫

2006 年 04 月 15 日

―阿知使主、縫工女を奉す―

「沖ノ島祭祀遺跡」といえば、３世紀から４世紀ころ、近畿地方に勢力を拡大し、日本全土を統一したとされる大和朝廷が、中国・朝鮮半島に進出する際に、その航海の安全と対外交渉の成功祈願やその成就を感謝する祭典が行われた跡です。

祭祀場は、沖ノ島の南西部の宗像大社・沖津宮周辺にそびえる巨岩周辺に広がり、国家的な威信をかけた一大祭典を行ったところです。

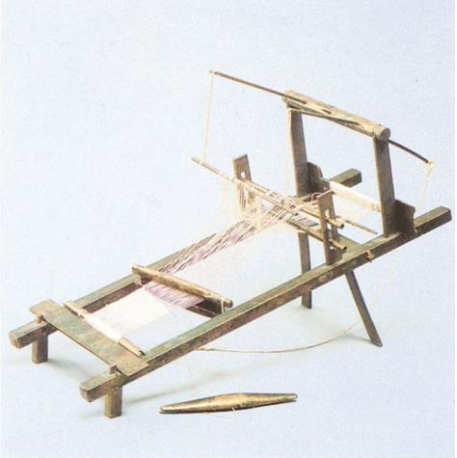
写真の紡織具は、なぜ沖ノ島にあったのでしょうか？　朝廷の歴史書「日本書紀」の記述からみてみましょう。

「応神天皇 37 年、阿知使主（あちのおみ）・都加使主（つかのおみ）が中国の呉国に派遣され、呉王に縫工女（きぬぬいひめ）を求めた。呉王は、４人の工女を与え、同 41 年、阿知使主らが呉から筑紫国に帰ったとき、胸形（宗像）大神が工女を必要とし、兄姫一人を奉った。…」とあります。

この記述は、朝廷の対外交渉の無事成功を感謝するための貢物を宗像大神が、阿知使主らに求めて献上させ、朝廷もこれに応えたことをあらわしています。

縫工女は機織職人。金銅製紡織具を沖ノ島の祭祀場に置いたことも考えられますね。

「沖ノ島」は、大和朝廷の対外交渉を行う際に、欠かせない祭場であり、その「神宝（約８万点）」は、「世界遺産登録」を目指す上で、欠かせない重要なものといえます。



（写真）金銅製紡織具

世界遺産登録事情５　　≪沖ノ島と宗像本土１≫

2006 年 05 月 15 日

「沖ノ島と宗像本土１」

沖ノ島で国家的な祭祀がはじまる４世紀、宗像本土では、前方後円墳が造られます。日の里３丁目の公園にある「東郷高塚古墳」が、そのころに造られた古墳です。

長さ６４．４ｍ、後円部の上から墓壙（ぼこう＝棺を入れる四角い穴）を掘って、丸太をくり抜いた形の棺を据え、粘土で固定していました。副葬品は盗掘を受けていましたが、鉄の刀や剣、矛の破片や勾玉（まがたま）、管玉（くだたま）などの装身具が出土しています。

沖ノ島祭祀では、岩上祭祀（がんじょうさいし）が行われ、大型の鏡や刀剣類、装身具などが供えられていました。同時代の古墳から出土する遺物と似ています。

北部九州では、苅田町・石塚山古墳、筑紫野市・原口古墳、宇佐市・赤塚古墳で、三角縁神獣鏡（さんかくぶちしんじゅうきょう）などの大形鏡が出土。

市内で発見されていないだけなのか、始めから持っていなかったのか、わかりませんが、中国（魏など）からもたらされた鏡は、畿内（大阪・奈良）の大和政権から地方へ下賜（かし＝配る）されたという説があります。

沖ノ島の鏡は、畿内からの下賜品か、大陸から直接もたらされたものか、宗像氏がどのように関わったのか今後課題となりそうです。

（写真）　三角縁神獣鏡

世界遺産登録事情6　≪東西交流の証≫

2006 年 06 月 15 日

「東西交流の証」

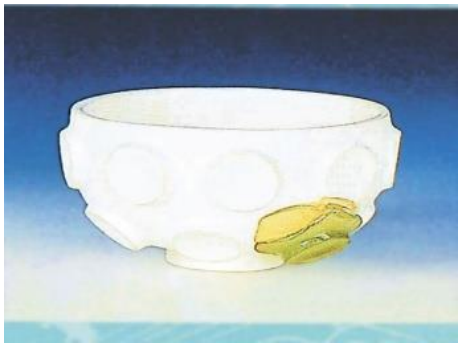
中国が南北朝時代とよばれた６世紀（今から約１４００年前）ころ、現在のイラクやイランのある中央アジアでは、胡族（こぞく）の人の国が次々でき、シルクロードや草原の道をとおって、ペルシアなど西域の金銀器やガラス製品、貨幣などの貴重な品々が、東方へもたらされました。

この品の一つに「浮出円形切子碗＝うきだしえんけいきりこわん（写真）」とよばれるガラス製の器があります。

これは、吹きガラスの製法でつくられた碗の表面を砥石で削り、丸い円文様を浮かび上がらせる切子という技法を使ったもので、中央アジアで成立したササン朝ペルシア（２２６年～６５１年）で流行したものです。

写真右は、市が行う世界遺産登録活動のシンボル「沖ノ島」の８号遺跡から出土したガラス製の碗。写真左は、中国の寧夏回族自治区李賢墓（ねいかかいぞくじちくりけんぼ）から出土した碗。よく似た形なので、同類のものと推測されます。

この「浮出円形切子碗」は、西域のササン朝ペルシアとその交易路のシルクロードを経て、「海の道」沖ノ島をとおり、「まほろば」大和へとつながる壮大な道があったことを物語る東西交流の証しとなる逸品です。



（写真）沖ノ島祭祀８号遺跡からの出土品　　復元した方（左）
寧夏回族自治区李賢墓からの出土品　　ガラス原型そのまま（右）

世界遺産登録事情７　　≪沖ノ島と宗像本土２≫

2006 年 07 月 15 日

「沖ノ島と宗像本土２」

沖ノ島で第２段階の国家的な祭祀、岩陰祭祀（いわかげさいし＊）が行われていた頃の宗像本土を紹介します。

岩陰祭祀が行われていた６～７世紀、本土では、久原澤田古墳群（現宗像ユリックス横の古墳群）や平等寺瀬戸、平等寺向原古墳群（赤間西地区泉ヶ丘団地近くの古墳群）など、各地で群集墳がつくられます。

群集墳の埋葬施設の多くは、石材を組み上げて部屋をつくり、横方向から出入りできる構造の横穴式石室となっています。

市内で見学できる古墳は、平等寺瀬戸１号墳（通常は管理面から施錠中です。見学希望の際は問い合わせ先へ連絡を）です。石室は前室と後室の２部屋があります。

ほかには、国指定史跡の桜京古墳（牟田尻）があります。石室内への立ち入りはできませんが、三角連続文（三角形の図柄を連続したもの）を描いた装飾古墳です。

岩陰祭祀と古墳の石室には、石材を使い、暗い部分を利用して祭祀や葬送儀礼を行っているところなど、どこか共通するところがあるようです。

夏休みの自由研究に調べてみませんか。

＊巨岩の岩陰で祭祀を行う岩陰祭祀は、６～７世紀（第２段階）に行われていました。祭祀が始まった４～５世紀（第１段階）は、巨岩（大きな岩）の上に祭祀場を設けて祈願を行う岩上祭祀（がんじょうさいし）でした。形態は第４段階まであります

（写真）沖ノ島４号　岩陰遺跡

世界遺産登録事情８　　≪最新技術をもとめて≫

2006 年 08 月 15 日

「最新技術をもとめて」

今から１６００～１３００年ほど前、朝鮮半島に百済（くだら）・新羅（しらぎ）・高句麗（こうくり）の３国がありました（三国時代）。

日本の大和朝廷は、朝鮮半島の鉄生産技術をはじめ、紡績、彫金、建築から土木技術に至るまでの、あらゆる先進技術や知識の導入に躍起になっていました。

この動きは、「日本書紀」の記録に多く見られます。４世紀中ごろの記録では、斯摩宿禰（しまのすくね）という人が得淳国（とくしゅこく）＝後の加羅（から）七国の一つで、現在、宗像市と姉妹都市の金海市（きめし）を含む慶尚南道（けいしょうなんどう）付近に派遣された話があります。

得淳王・末錦旱岐（まきむかむき）から、百済王が「東方の美しい国・日本に大船を仕立てて渡ろうとしたが、海は広く波は険しく、到着できなかった」という話を聞いた斯摩宿禰は、急いで百済国を訪ねました。

百済王・肖古（じょうこ）はとても喜び、五色の綾絹（あやぎぬ）と角弓箭（つののゆみや）、鉄鋌を彼に与えた記録が、日本書紀に記されています。

これで注目する点は、鉄鉱石から鉄精錬技術を駆使してつくる鉄製品の原素材となる鉄鋌を斯摩宿禰に与えていることです。

当時の日本は、鉄鉱石から鉄をつくる技術はまだ不十分で、鉄製品は鉄鋌を輸入し、加工することでつくられていたのです。

写真は市が進めている世界遺産登録活動のシンボル「沖ノ島」にある 16 号遺跡から出土した鉄鋌です。上述の百済王の話で、「大船を仕立てて渡ろうとしたが、海は広く波は険しく・・・」とあるように当時の玄界灘は航海の難所で、航海の安全を祈る思いはひとしおでした。

このことからも、鉄鋌は最上の奉献品でした。鉄鋌は航海の無事を祈った人々に思いを馳せる逸品です。

（写真）鉄鋌（てってい）

世界遺産登録事情９　　≪沖ノ島の第３段階祭祀遺跡≫

2006 年 09 月 15 日

「沖ノ島の第３段階祭祀遺跡」

沖ノ島祭祀の第３段階は、半岩陰・半露天祭祀が行われた時期（７世紀後半から８世紀前半まで）です。５号・１４号・２０号遺跡が該当します。

第２段階の岩陰祭祀と第４段階の露天祭祀との過渡的な時期で、遺跡も少数です。代表的な５号遺跡からは、唐三彩（とうさんさい）が出土しています。

唐三彩は、唐の時代（西暦６１８年～９０７年）につくられた焼き物で、素地に白化粧、透明釉（とうめいゆう）をかけ、緑色と黄色の鉛釉を加え、低温で三色に焼き上げたものです。

この遺物は、日本が中国（唐）を中心とする東アジアの国際情勢の情報入手や、先進的な唐文化の摂取が目的の遣唐使使節団により、持ち込まれた可能性を示す資料です。

日本と大陸を結ぶ掛け橋として、沖ノ島は重要な位置にあったことがここでもうかがえます。

（写真）唐三彩長頸瓶（とうさんさいちょうけいへい）の口縁部分

世界遺産登録事情１０　　≪「黄金の国」ジパングが求めた「財宝の国」≫

2006 年 10 月 15 日

「黄金の国」ジパングがもとめた「財宝の国」

イタリアの旅行家マルコ・ポーロが、１２７１～１２９５年にかけてシルクロード沿線諸国や中国・元（げん）王朝などの東方諸国を旅した旅行記「東方見聞録」に、「黄金の国・ジパング」と紹介された日本は、ヨーロッパ諸国の人々の心を魅了するものでした。

黄金の国と紹介された日本にも、「財宝の国」を求めて奔走した時代がありました。大海原を渡り、相手と戦って財宝を奪取していた大和朝廷の姿が、「日本書紀」の記録に残されています。

４世紀ごろの仲哀（ちゅうあい）天皇８年秋９月の条に「天皇はどうして熊襲（くまそ＝現在の熊本県球磨地方あたり）が従わないことを憂えるのだ。この国は、荒涼とした土地で兵を挙げて占領するところではない。この国よりももっと宝のある国がある。その国には、眼を輝かさんばかりの金銀財宝がたくさんある。その国の名は、新羅（しらぎ）国という」。

妃の神功皇后（じんぐうこうごう）に神がかりした神託（神が誰かの口をかりてその意志を人々に伝えること）の一説です。

また仲哀天皇９年、冬１０月の条には、大水軍を率いて新羅国に攻め込み、降伏させ、金銀財宝や艶やかな絹織物などを船いっぱいに積んで凱旋したことが記されています。

これより以降、新羅国と大和朝廷の間には貢物を満載した大船団が航行するようになるのです。　沖ノ島祭祀７号遺跡から発見された金製指輪（写真）は、新羅国で製作されたものであり、『日本書紀』に記す新羅国と大和朝廷の交流を実証する資料として重要な逸品です。

（写真）金の指輪

「沖ノ島祭祀７号遺跡」出土品（「海の正倉院」沖ノ島　−宗像大社神宝館沖ノ島大国宝展記念−より転載）

世界遺産登録事情１１　　≪沖ノ島と宗像本土（４）≫

2006 年 11 月 15 日

沖ノ島と宗像本土（４）

今回は、沖ノ島祭祀の最終段階である露天祭祀と宗像本土をみていきます。

露天祭祀は、岩上や岩陰祭祀のある巨岩群に至る山道沿いにあり、地形が比較的平らな所にあります。現在でも、遺跡内には土器片や滑石製品（かっせきせいひん）＝写真＝など、足の踏み場がないほど密集しています。

露天祭祀の時期は、日本が律令体制として整う奈良時代から平安時代です。

一方、宗像市では、三郎丸今井城（さぶろうまるいまいじょう）遺跡から、奈良・平城京などで流通していた貨幣（和同開珎＝わどうかいちん・万年通宝＝まんねんつうほう・神功開宝＝じんぐうかいほう）が、１２０枚以上出土。当時の宗像では、貨幣としてではなく、祭りの道具に使われていたようです。

次に、田久（桜美台）や朝町（自由ヶ丘南小）などでは、火葬した死者の骨を入れる骨蔵器が出土。福津市では、古代寺院の神興廃寺（じんごうはいじ）が建立。いずれも仏教の影響を伝えています。

武丸大上げ（たけまるおおあげ）遺跡（ＪＲ城山トンネル付近）では、官道整備で建てられたと考えられる駅家（うまや＝馬の乗り継ぎ場で、文書の受け渡しもした施設）と考えられる建物跡で、鬼瓦などが出土しています。

その後、遣唐使が廃止されると、ほぼ同時期に沖ノ島での大規模な国家的祭祀は終焉（しゅうえん）を迎えました。

「露天祭祀から出土の滑石製品」

世界遺産登録事情１２　　≪神様へのお願い今昔≫

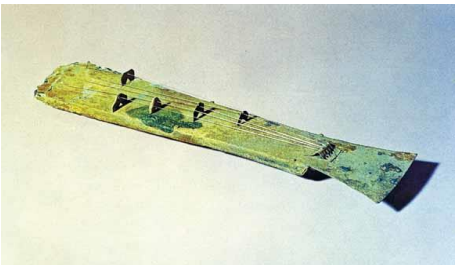
2006 年 12 月 15 日

「神様へのお願い今昔」

師走になると、大晦日には「除夜の鐘」、正月には「初詣」と神社・仏閣を訪れ、「家内安全」や「学業成就」、「恋占い」に「おみくじ」など、わたしたちは、鐘を撞（つ）き、鈴を鳴らし、拍手（かしわで）を打つなど、いろんな所作作法（しょささほう）でさまざまなお願いをしています。

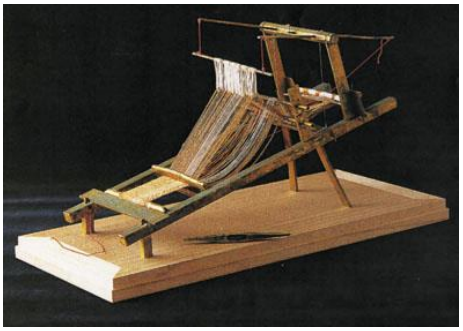
古代の大和朝廷でも、神様にさまざまなお願いをしていたようです。４世紀末の王・仲哀（ちゅうあい）天皇の時代の「日本書紀」の記録、仲哀天皇９年３月の条に、神功皇后（じんぐうこうごう）が、神主（かんぬし）となり、仲哀天皇に神託（神が誰かの口をかりてその意志を人々に伝えること）を授けた神の名と神託の本意、仲哀天皇の死の真相などの「占い＝神事」をしています。

この神事では、神功皇后が、斎宮（さいくう＝神事をする場所）に入って神主となり、武内宿禰（たけのうちのすくね）に命じて琴を弾かせ、中臣烏賊津使主（なかとみのいかつのおみ）を審神者（さには＝神託の意味を解いて人に伝える人）に任命し、千機高機（ちはたたかはた＝高性能な織物の織機）を琴頭尾（ことかみことしり＝琴の頭の部分をことかみ、琴のしっぽの部分をことしり）に置く所作作法で、神事をしています。



金銅製雛形琴（「海の正倉院」沖ノ島―宗像大社神宝館沖ノ島大国宝展記念―より）

市の活動で、世界遺産登録のシンボルとなる「沖ノ島」の５号祭祀遺跡から発見された金銅製雛形琴（こんどうせいひながたこと＝上写真）や、今年６月に国宝に一括追加指定された金銅製高機（こんどうせいたかはた＝下写真）は、先の千機高機、琴頭尾の所作を古代、沖ノ島で行われた「神託神事」の所作に結びつける重要なものです。



金銅製高機

世界遺産登録事情１３　　≪沖ノ島の地質≫

2007 年 01 月 15 日

「沖ノ島の地質」

玄界灘に浮かぶ周囲４キロの沖ノ島、その基盤を支える岩石を見てみましょう。

船から上陸して、みそぎ場所へ行くと、黒い縞々模様（しましまもよう）の岩石が見られます。これは、頁岩（けつがん）とよばれる薄くはがれやすい岩で、長崎県の対馬でも見られます。

対州層群（たいしゅうそうぐん）という名前の地層で、対馬では硯（すずり）として書道の道具に加工され使われています。新生代第３紀漸新世（ぜんしんせい：約３０００万年前）の堆積岩です。

黒い縞々模様の頁岩

沖ノ島の大部分は、石英斑岩（せきえいはんがん）とよばれる火成岩（かせいがん）からできています。対州層の形成後に地下から押し上げられてできた岩で、新生代第３紀中新世後期（ちゅうしんせいこうき：約８００万年前）以降に形成されたと考えられています。

沖ノ島の最高峰・一ノ岳（標高２４３・１ｍ）には、現在も周辺を行き交う船舶の安全を見守る灯台があります。ここの基盤もその岩石です。

石英斑岩が長年の風化で、母岩から、はがれ落ちたところがあります。みそぎをする海岸にある、太鼓岩もそのひとつ。島の山腹には、このようなはがれ落ちた転石が数多く見られます。

古墳時代に行われていた岩上祭祀や岩陰祭祀は、この石英斑岩の転石を利用して行われていました。

灯台の基盤は石英班岩

沖ノ島、継続審議に　課題解決して一刻も早く暫定リスト掲載へ

2007 年 02 月 15 日

文化庁へ昨年１１月２７日に提出していた、「沖ノ島と関連遺産群（世界文化遺産国内暫定一覧表追加提案書)」が１月２３日、世界文化遺産暫定リスト選考で、継続審議となりました。「海の正倉院」として有名な沖ノ島と関連する８万点の国宝などは、価値が高いと評価を受けると同時に、文化庁から３つの課題を投げかけられました。

市民のみなさんと一緒に取り組んできた世界遺産登録活動が、実現へ向けて１歩前進しました。今回は、世界遺産とは何か、市が世界遺産として登録を進めている内容を紹介し、今後の世界遺産登録活動へ弾みをつけていきます。

●文化庁からの３つの課題

①主題＝海洋文化と祭祀権との関係を総合的に捉え、祭神を招き祀った他の神社との関連性も視野に入れた検討が必要。

②資産構成＝胸形（宗像）氏に関連する一連の諸要素を特定し、構成資産とすべき古墳群の範囲が適切か検討が必要。

③登録基準の妥当性＝提案書説明のうち、歴史上の重要な段階を物語る観点から、構成資産の正確な評価記述が必要。

継続審議の結果を受け、谷井博美市長は、「投げかけられた課題は、難しい課題ではない。専門家の意見を聴きながら、一刻も早く課題解決を図りたい」とコメントを発表しました。文化庁からの課題を十分に精査・分析して、早急に今後の対応を検討することが必要です。

沖ノ島と関連遺跡群は、地元の人たちが今日まで守り継いできた貴重な遺産。保護・保全し、次の世代へ引き継ぐことは、現在のわたしたちの責務でもあります。

世界遺産登録内容＝広報紙２月１５日号２・３ページ「沖ノ島と関連遺産群（世界文化遺産国内暫定一覧表追加提案書）」から抜粋（PDF５００キロバイト）

世界遺産登録事情１４　　≪大海原を越えて≫

2007 年 02 月 15 日

「大海原を越えて」

市の世界遺産登録活動で、シンボル的な存在の「沖ノ島」と福津市の「津屋崎古墳群」などの関連遺産群。

４～10 世紀にかけて、大和王権とそれに続く藤原京や平城京、長岡京、平安京など、奈良時代や平安時代の政府が、東アジアの国々と交流するなかで、航海の安全を祈願する大規模な祭祀を行った場所である沖ノ島と、その祭祀を支えていた胸形氏に関連する遺産群として脚光を浴びています。

しかし、沖ノ島を目指して大海原を行き来したのは、この時期だけでなく、それ以前の時代から受け継がれたものでした。

沖ノ島の東南部の港のすぐ上にある平坦地や、沖津宮社殿左奥の岩陰遺跡などからは、縄文時代前期（６０００年前ごろ）の曽畑式土器（＊）やブリ・マダイなどの魚類、オオミズナギドリやウミウなどの鳥類、ニホンジカ、現在はこの海域周辺では見ないニッポンアシカの骨などが出土しています。

特に曽畑式土器は、有明海沿岸の熊本県宇土市にある貝塚から最初に発見された土器で、その表面に刻まれた文様が朝鮮半島で発見の丸 底櫛目文（まるぞこくしめもん）土器とよく似ていることから、両地域の密接な関係をうかがい知ることができます。

曽畑式土器が発見された瀬戸内海や周防灘、響灘、玄界灘、有明海を結ぶ広い海域では、大型魚を釣るために、朝鮮半島で開発された結合釣り針（オサンリ式釣り針）も発見されていて、魚釣り技術をはじめ、さまざまな技術の交流が想定できます。

このことから、沖ノ島にいた縄文人像を想定すると、丸木舟を自在に操り、ニッポンアシカをしとめ、大海原を越えて、朝鮮半島や琉球列島に漕ぎ出し、たくましく生きる姿がうかがえます。

＊深い鉢形で底の丸い幾何学的な文様が特徴

ニッポンアシカの骨

縄文土器

「海の正倉院」沖ノ島－宗像大社神宝館沖ノ島大国宝展記念－より転載

世界遺産登録事情１５　　≪沖ノ島の自然≫

2007 年 03 月 15 日

「沖ノ島の自然」

沖ノ島の「沖の島原始林（＊）」や「カンムリウミスズメ」は、国の天然記念物に指定されています。

沖ノ島の植物は、現在１８０種が数えられ、なかでもオオタニワタリやビロウなどの亜熱帯植物が分布する北限とされています。

亜熱帯植物が自生する理由には、海流が関係しています。フィリピンから沖縄を経由して日本海に流れ込む対馬暖流が、暖かい空気を運んで来るからです。

沖合からみる沖ノ島

冬、沖ノ島より南に位置する宗像本土が、なぜ寒いのでしょうか。それは冬型の気圧配置と、大陸からの非常に冷たく乾燥した季節風が関係しています。

この季節風は、沖ノ島上空を通るとき、暖流で運ばれた空気とぶつかり、上空で急激に冷やされ、水蒸気が雲になります。その後、その雲は冷たい風で雪雲となります。宗像上空に到達し雪を降らせ、同時に太陽の熱もさえぎって寒くします。

夏、沖ノ島は周りを海に囲まれているため、空気が冷やされ、宗像より過ごしやすい気候ですが、実際に上陸すると、大量に発生するアブに悩まされます。まとわりつき、刺されるとチクチク痛いので、やっかいものです。

沖ノ島は、独特の気候風土を持っていて、植物、動物などの生態系には、特異性があります。

＊「沖の島原始林」は登録名称です

「大発生するアブ」